

## ベビーブーマー世代の親子関係 I

## —— 親子の経済関係の移行の実態 ——

千葉大教育

○宮本みち子

日大習志野高校

飯塚和子

《目的》 1991年から1992年にかけて20台未婚青年の親子関係研究に取り組み、分析結果を発表したが、その結果をふまえて（家計経済研究所編 1994「『脱青年期』の親子関係と出現と親子関係—経済・行動・情緒・規範のゆくえ」）、現代的特質を持つ親子関係が、いつ頃からどの世代に浸透したのか、また、これらの構造が社会経済的環境条件の変動する中で、矛盾なく維持されるかどうかを検討するため、戦後の第一世代であるベビーブーマーの親子関係に焦点をあてた。本報告は、ベビーブーマーとその親との経済関係が、青年期から現在までどのように推移したかを分析し、親子の経済関係が世代間関係の特質をどのように規定しているかを明らかにする。

《方法》 1947～1949年生まれの男女を対象にアンケート調査を実施した。【調査期間】 1992年7-8月【調査地】 東京都府中市および長野県松本市【調査方法】 住民基本台帳より層化2段階抽出。府中市は留置調査と一部郵送調査を併用、松本市はすべて郵送法。

《結果》 結婚前に家計を助けていた者が多いが、その割合は学歴・親の経済水準で異なる。結婚前も結婚後も親の経済的援助を経験した者は10%台で松本の方が多い。経済的援助の授受は、親から子への援助が勝っている。結婚後の親子の経済力では、府中の約半数、松本の3割が、“常に親が上”である。親子の経済関係の推移は親の経済水準と地域性に規定されている。府中では、親の高い経済水準を背景に、親から子への経済的・非経済的援助に支えられた良好な親子関係を形成している階層が特徴的であるのに対して、松本では、あととり同居の形をとった親子一体的な関係が維持され、それを土台とする親子の援助関係が強い。